

中野香織

③6 ブリテイッシュ・エンバラスメント

わたしも楽しんでまいりましたよ「スパニッシュ・アパートメント」。ただし、「わかるわかる」とうなずいたのは、敦子さんのように「留学の日々のモラトリアムな気分」ではなくて、セシル・ド・フランスがロマン・デュリスのお尻をつかんで伝授する「愛の技法」に、なんです。

それにしても、人種のるつぼの共同アパートがつまり統合ヨーロッパの縮図ってことですか。ステレオタイプに落ちずにそれぞれのお国らしさをも出し出していた俳優たちはフレッシュでしたが、こそばゆかったのは「イギリス代表」のケリー・ライリーとその弟の描かれ方。大陸諸国から見ると、ちよつとまわりから浮いてる奴らって感じてしたよね。アメリカ人（↑存在感希薄）とのいちゃつきが大惨事を招きそうなきときにはヨーロッパ中が助けに駆けつけるっていうエピソードも意味深で。結局、危機を救ったのがイギリス人の身内の気まずいハダカというオチには笑いましたけど。

イギリス人の気まずいハダカ。そう、ここに話をもっていきたかった（すいません）。ヨークシャーの主婦が「55歳、今脱がなくて、いつ脱ぐの」なヌードカレンダーを作ると「カレンダー・ガールズ」の笑撃さめや

ドーバー 越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織



オブジェ制作=井上陽子

© Buena Vista International



「カレンダー・ガールズ」
5月、日比谷シャンテ・シネにて公開

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

らず。敦子さんは「イギリス人って脱ぐのが好きなのねえ」としみじみしてらしたけど、シエフィルドの失業おやじのストリップ映画の前例といい、ハダカはハダカでも、観てるほうが気まずい思いを抑えるために人間的寛容さを発揮して笑って受容せざるをえないキワモノ感のあるハダカに価値があるみたいですね。実は『ガーディアン』紙が「フル・モンテイ」と「リトルダンサー」と「カレンダー・ガールズ」の土台にあるものを「ブリテイッシュ・エンバラスメント」(英国的当惑)と呼んでいてなるほどと思ったんですが、映画中人物および観客の当惑を手玉にとるなんて、やはり浮いている人種ならではの荒業かも。

とはいえ、もともとイギリス人はハダカなら見境なく好きだったみたい。18世紀には、ねえちゃんのハダカもヴィーナス像もいっしょくたにして喜んでたようで、この野蛮ぶりを見かねた批評家が、衣服をはぎとられた裸体ネイキッドと区別すべく、芸術的ハダカたる「ヌード」という概念を持ち出して大衆を啓蒙しようとしたらしい。

20世紀の美術評論家ケネス・クラークも『ザ・ヌード』という本で両者の違いを念押ししてるし。ヨークシャーの主婦が「ネイキッドではなく、ヌードになるのよ」と言うところを見ると、啓蒙の成果はあったよう。でも当惑のハダカは芸術的ハダカに属するのでしょうか？